



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	デザイン・シンキング実施報告 : 沼田町まるごと自然体験プロジェクトへの提言
Author(s)	椎名, 希美; Shiina, Nozomi; 杉村, 逸郎 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 29, 99-103
Issue Date	2022-03
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.29.99
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84354
Type	departmental bulletin paper
File Information	HighEdu_29_099.pdf



Design Thinking Implementation Report: Proposals for the Numata Town Whole Nature Experience Project

Nozomi Shiina,¹⁾ Itsuro Sugimura¹⁾ and Toshiyuki Hosokawa²⁾*

1) Institute for the Promotion of Business-Regional Collaboration, Hokkaido University

2) Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University

デザイン・シンキング実施報告 —沼田町まるごと自然体験プロジェクトへの提言—

椎名 希美¹⁾, 杉村 逸郎¹⁾, 細川 敏幸²⁾**

1) 北海道大学産学・地域協働推進機構

2) 北海道大学高等教育推進機構

Abstract — For the first time since one of the authors participated in training at Stanford University, we gave a two-day intensive lecture on design thinking that incorporated everything learned at the Firefly Museum in the town of Numata in October 2021. In this program, four students worked in groups to conduct all the processes of design thinking, such as interviewing local people, identifying issues, creating prototypes, and then asking for their opinions on the ideas again. The comments from the audience in the final presentation and those from the participating students indicated that by applying design thinking, we are able to introduce a better learning method for proposing solutions to problems in the field.

(Accepted on 16 December 2021)

1. はじめに

筆者のひとり、2020年1月にスタンフォード大学においてデザイン・シンキングの手法を学ぶ研修に参加した(細川ほか2021)。以後、2020年度及び2021年度の全学教育科目「人間と文化 People and Culture: Introduction to Design Thinking」(英語により

開講)、産学・地域協働推進機構で開催した2020年度及び2021年度の「ハッカソン」でデザイン・シンキングの手法を導入した。しかし、コロナ禍でオンライン授業となったため、実際に通りに出て通行人にインタビューすることはできず、クラス内でインタビューし合うことで講義を構成した。

一方、今回産学・地域協働推進機構で企画した沼

*) Correspondence: Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, Japan
E-mail: thoso@high.hokudai.ac.jp

***) 連絡先: 060-0817 札幌市北区北17条西8丁目 北海道大学高等教育推進機構

表 1. 2日間のスケジュール

【16日】	
08:30~10:30	移動
10:30~11:00	「ごはん」の活動の説明
11:00~12:30	細川先生レクチャー (アイスブレイク・インタビューの方法)
12:30~13:30	ランチ
13:30~14:30	インタビュー実施 (現地住民や NPO 法人の方へ)
14:30~15:30	GW (テーマ決め・情報収集)
15:30~17:00	GW (アイデアを考える)
【17日】	
09:00~10:00	GW (アイデアの整理) 午前中は平行して森の幼稚園視察
10:00~11:00	GW (アイデアをしぼる)
11:00~12:00	GW (プロトタイプ作成)
12:00~13:00	ランチ
13:00~14:00	関係者にヒアリングを行う (フィードバックをもらう)
13:00~14:00	GW (アイデアをブラッシュアップする)
15:00~16:00	最終発表 (問題解決案を伝える) NPO 法人理事に提案
16:30~18:30	移動

田町への提言プログラムは、現地の人々にインタビューし、プロトタイプを作成した後も、もう一度アイデアについての意見をうかがうなど、デザイン・シンキングのすべてのプロセスを実施することができた。初めての完全実施であることから、ここに報告する。

2. プログラムの概要

本プログラムでは、学生と教員が現地を訪れ、現地 NPO 法人「ごはん」の活動を視察した。そこで現地の方との意見交換を交えながら、沼田町における自然学校の活動を知った後、デザイン・シンキングの手法を用いて、プログラムの改善案、もしくは、新たなビジネスモデルの提案を行うことを目的とした。

参加者は著者 3 名と 4 名の学生で、学生は男女 2 名ずつで構成される。学生の所属は、北海道大学工学院、国際広報メディア・観光学院、文学部、小樽商科大学商学部である。開催場所は雨竜郡沼田町幌新にある「ほたる学習館、雪の学校、炭鉱資料館」を併設する一棟の建物である。

「ごはん」は、様々な能力・特技を持った人々（ノマドワーカー）が活躍する場をコーディネートする

組織体としての「自然学校」設立を進めるため活動しており、これまでに、お馬さんふれあい体験会、森のようちえん、テントサウナ勉強会、雨竜川 SUP ツアー体験会などを沼田町で実施している。

3. 講義スケジュール

3.1 1日目

表 1 に今回のプログラムのスケジュールを示す。2021 年 10 月 16 日 8 時半に本学に集合し、2 台の車に分乗して 10 時過ぎに現地に到着した。バス利用の集中講義のような、行路でのアイスブレイキングはできなかった。到着後すぐに「ごはん」の活動内容や将来計画などの説明を受ける。午前中はアイスブレイキングを使ってチーム名を決める（チームヒューマンフォーカス）とともにアイデアをたくさん出す方法を学び、次にデザイン・シンキングにおけるインタビューの方法を学び、2 人ペアで互いに相手の特徴を発表した。また、デザイン・シンキングの意義と手法についても最初に説明した。並行して近郊ののぞき窯や化石博物館にも訪問し、地域のルーツを探ると共に、同時開催されていた「森の幼稚園」の活動の見学も行った。

午後は2グループに分かれて、それぞれ2名ずつにインタビューして、合計4名から沼田町や事業の様子を学び取った。4名のうち2名は沼田町役場の職員、2名は「ごはん」の職員である。インタビュー後は1時間をかけて、お互いのグループのインタビューの情報を共有した。そこから30分は、課題の抽出に使い、残りの1時間で課題解決のアイデアを出し合った。たくさんアイデアを出すことが重要であると指導して、ホワイトボードいっぱいPost-itを貼る状態まで議論した。アイデアが尽きかけた時点で、教員がことわざカルタから1枚選び、そのことわざをもとにさらにアイデアを出す方法を繰り返した。例えば、「目から鱗が落ちる」というカードから連想するアイデアを出すわけである。

3.2 2日目

最初の1時間は、出されたアイデアをグループ分けすることから始めた。1枚のホワイトボードに貼られたPost-itは、分類され2枚のホワイトボードに整理された(図1, 図2)。

分類すると、芸術、食物、祭り、生死、物語、モノづくり、エネルギー、林業、炭鉱など多岐にわたっていることがわかる。これらのアイデアは、最終発表時にも注目され、参加者の一部は今後の参考のためにと、この結果を撮影していた。アイデアが整理された後、次の1時間で解決策とするアイデアを決定した。本グループは、森林の成長とヒトの成長を同期させるアイデアを採用した。昼食までの1時間は、デザイン・シンキングの特徴である、プロトタイプ作成に挑み、ダンボールやモール、粘土、色紙、レゴなどを活用して2つのプロトタイプを完成させた。

図3のプロトタイプは木の成長を表し、木の前と下に人の成長を表す小物を粘土で制作している。右下の穴は、遺灰を埋めた状態を表している。午後は、「ごはん」の職員を相手に、プロトタイプを使用して、アイデアを説明した(図4)。全体を貫くコンセプトとして「森と生きる～誕生林から樹木葬まで～」を掲げた。手前に見える模型は、沼田町の森を改変した、「人生の森(プロトタイプ2は図4の右下に見える)」である。協力者の人生とともに歩む森をイメー



図1. 整理された1枚目のホワイトボード

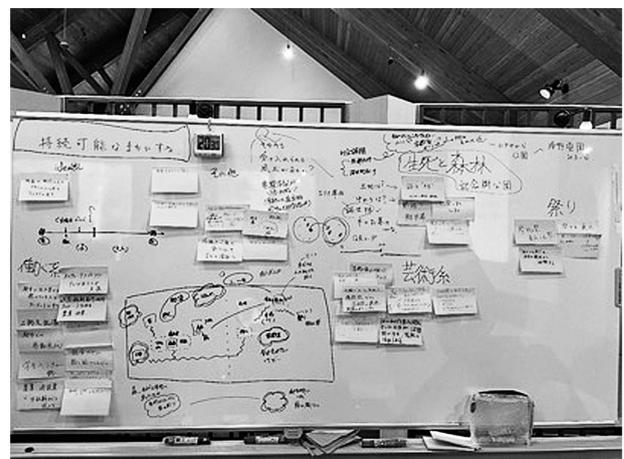


図2. 整理された2枚目のホワイトボード

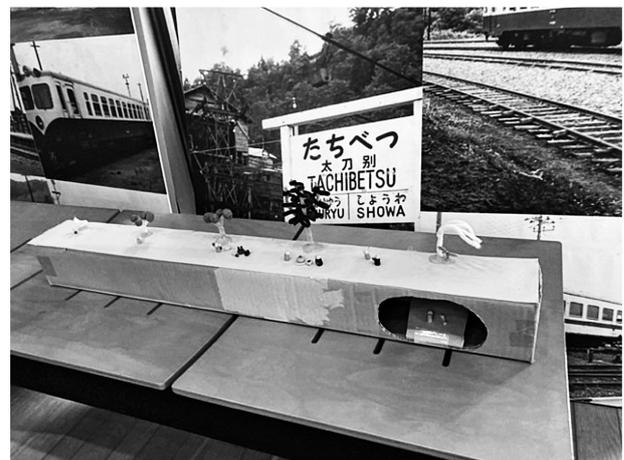


図3. プロトタイプ1

ジしている。人生の森の協力者は、いくばくかの費用を支払うことで、誕生とともに「人生の森」に1本の木を植林する。この木は協力者とともに成長し、協力者は人生の節目ごとに記念品をもらったり、木の成長を確認したりして交流を継続する。亡く



図4. アイデアについての意見聴取の様子



図5. 最終発表の様子

なった後は、木の根元に遺灰を埋めて木のさらなる成長の養分となる。協力者の家族の木も近傍に植林して家族の森ができる。

学生たちは「ごはん」スタッフによるきびしい指摘やコメントを受けた後、1時間を使ってアイデアの再調整を行った。このとき、発表時間を15分に制限することを伝え、パワーポイントを用意すること、発表者の選定、発表内容の変更を指示した。

4. 最終発表

15時からの最終発表会（図5）には、「ごはん」のスタッフならびにプロジェクトリーダー、沼田町役場の職員、横山茂沼田町長、森の保全活動に訪れていた ezorock のボランティアら12名が聴衆として参加した。発表後16時までの50分間にわたり質問や感想が相次ぎ、アイデアの面白さや独創性に好意的なコメントが多数寄せられた。

樹木葬のアイデアはすでに存在するが、人生とともにする森のアイデアは興味深い、町面積の70%を占めるもののあまり活用されていない森の活用方法を提案されたのは驚きであった、などである。

5. 参加学生の感想

プログラム終了後、4名の学生から参加した感想を聴取した。ポジティブな感想の一部を以下に列挙

する。

- 一緒に参加したチームメンバーや皆様のサポートが心強かった。
- 沼田町に初めて訪れたが、町の皆さまが温かく、非日常を感じる事が出来た。
- 自分自身も成長することが出来た。
- 取り組みに対して、真摯に向き合ってください方や温かく迎えてくださる方が多かった。関係人口の1人になりたいと感じた。
- フィードバックの重要性を再認識できた。こういう風にビジネスをつくるのか、課題はこうやって抽出するのか、というところが理解できた。
- 魅力について深く考えるきっかけとなった。都会からすると沼田町はすごく魅力的だが、他の町と比べると同じ資源と言える部分もあるかもしれないが、最期に残るのは人だと感じ、開拓した歴史や紡いできたものを大切にして次につなげていくことが必要だと思った。
- スピーディに考え続ける訓練が出来た。一方、ネガティブな感想は以下の通りであった。
- 限られた2日間での実施は、少し短い印象があり3日間ぐらい欲しかった。
- スピード感が早くて、自分の頭をじっくり整理して話をするという強みをあまり生かせなかった。
- 実際に住んでいる町内の方々ともっともっと交流したかった。（突撃街頭インタビューなど）

6. まとめ

スタンフォードでの研修に参加して以降初めて、学んだことをすべて導入したデザイン・シンキングの集中講義を行った。参加者のうち2名が大学院生、2名が学部学生であり、専門教育を受け、ある程度の専門性を持ち合わせるとともに有能な参加者であったことが、最終発表までそれほど不安なく運用できた要因であろう。例えば、参加者が大学1年生なら、これほど多数のアイデア、関心を引く最終のアイデアは出てこなかったのではないかと考えられる。

最終発表での聴衆からのコメントや参加学生の感想から、デザイン・シンキングを適用することで、現場の課題に応じた解決策を提案するよりよい学習方法を導入できたことが示された。

また、このような活動を定期的に開催していくことで、多くの町の方々にとって第三者・外部からみた沼田町に対するアイデアや提案、気づきを提供できる、双方にとってアカデミックな学びの場としての地域連携が実現できることも明らかになった。

経済産業省は企業が生き残るための基本方針として「デザイン経営」を推奨している（産業競争力とデザインを考える研究会 2018）。そこでは、「顧客が企業と接点を持つあらゆる体験に、その価値や意志を徹底させ、それが一貫したメッセージとして伝

わることで、他の企業では代替できないと顧客が思うブランド価値が生まれる」としている。デザイン・シンキングは、顧客起点で思考させ、発明とイノベーションをつなぐための効果的な教育手法である。デザイン・シンキングが、日本の大学教育に深く浸透し、日本の将来を作っていくことを期待したい。

謝辞

沼田町の方々や「ごほん」の皆様には、週末にも関わらずご参加ご協力いただきましたことを感謝いたします。

文献

- 産業競争力とデザインを考える研究会（経済産業省・特許庁）（2018）, 『「デザイン経営」宣言』 <https://www.meti.go.jp/press/2018/05/20180523002/20180523002-1.pdf>（2021年11月12日参照）
- 細川敏幸, 鈴木久男, 齊藤準, 吉永契一郎（2021）, 「デザイン・シンキング入門 —スタンフォード大学 d. scholl 研修報告—」, 『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』 28, 73-81